續猿蓑集

911.3
ソ

續猿蓑集巻之上

八九間空で雨降る柳かな　芭蕉
春のからすの畠ほる声　沾圃
初荷とる馬子もこのみの羽織きて　馬莧
内はどさつく晩のふるまひ　里圃
きのふから日和かたまる月の色　沾
狗脊のかれて肌寒うなる　蕉

ウ

渋柿もことしは風に吹れたり　　里

孫が跡とる祖父の借銭　　莧

脇指に替てほしがる旅刀　　蕉

煤はきの日を旅籠屋の昼　　沾

約束の小鳥一さげ売にきて　　莧

十里ばかりの余所へ出かゝり　　里

笹の葉に小路埋ておもしろき　　沾

何となう門の番つけ　　蕉

渋川へ人の縁先は浅き嬲坊主　　里

やつれし峠も見ゝ家の名されれ　　莧

なみ所よおもてる花の見世あひて　　蕉

のんきりに見ゆる梅のたく口　　沾

まぢめしき法川落れの後ちまま　　莧

伊勢路の下向に遊びつゝ逢　　里

長持に小挙状伸乃そハしと　　沾

くりふるさ吹気の晴るあらせ　　蕉

禅寺に一日あそぶ砂の上　里

櫛の角乃きてぬ貫穴　覓

浪むかしの牛に借をとふや　蕉

さられぬ娵にもる子内證　沾

月待に傍輩衆のうちそろひ　覓

籬の菊の名をきゝはし　里

咲れて年て爰木も樽もさびくのをり　沾

伴僧はしる駕乃わき　蕉

削(ソク)やれに長刀坂の冬の風　里

まぬさに置のことわれぬ　覓

引立て呼寄に殊出る子とゝゑさ　蕉

笠川と火入に押もて薫　沾

花のとをや踏しぬ妻のいやくされて　覓

瀬かしらのあるかなきふの形　里

雀(カラ)の字や揃ふて渡る鳥の声　馬莧

てり葉の岸のおもしろき月　沾圃

売家を買て住れた秋暮て　里圃

鵜川しかけるいものこゝく月酒　莧

霜ちまくる菩修ふ子とも五六人　沾

遠きまいてふの洗足　里

ウ
悔しきそれの年の一歩のんでこそかなひ　莧
清悟きれんてさまふりまる　沾
よすゝきに除茶ぶおのが気色しく　里
立鳴りさつる國二方乃客　莧
何事もなくてめでたき祝迎　沾
風よくあすかるお觜の穂の月　里
慶祈　秋の住み住みて　覚
耐徒のさいさし無尾呼び　沾

時きつる伊勢乃半洲のかしま舞り　里
萬其ちまう衽わらぬ一陣　莧
借来もまかりて寒き石盃　沾
来たら静かなる半乃深縁　里
十ヲ
鶯の鳴あそ雪ぞ掃除し　覚
まさな合点て構ふて居る　沾
達しに居らる紀さんを中栄く　里
之済毅楽の花のさきかや　莧

汁の実にこまる茄子のもり盡て　佑
あらしも麦をすん刈てとほ　里
にしは寺の指図をもちし　蕉
鷹のおさへ乃あやそ淋しき　佑
隣ありてよさそうな小商　里
昇かしこて碓よふ野陌ふ　蕉
肌入て秋になりゆく草の月　佑
彭よこちろくら遊の露　里

け盛を寶の無孔あをも向て　蕉
ひえ付て切り　打粗乃衣内　佑
亜のまぎれさ帷子附のさもひ粗　里
寄て氣味よき杉菌の風　蕉
花のけ菜び立縦らの縁くり　佑
あら国の土のかゝくりけるふ　里

せゝゝ立鷹引すゆる嵐かな　　里圃

冬のまさきの霜ながら飛　　沾圃

大根のそだゝぬ土にふしくれて　　芭蕉

上下ともに朝茶のむ秋　　馬莧

断切に月見の集を誘　　沾

蒸らちもしとなる須　　里

知恩院の替り紙鳴揺りて　莧
法しらぬ猫も楓ちやく　沾
姐の縫にみえうけなし　里
月剃て字幽もよみなかなしかり　莧
状箱を駿河の飛脚持よりて　沾
まつこ七川に色やう成日の紅　里
草の葉ふよくみく気分の泡ちきり　莧
仔弱氣つふ緑とりの角　沾

うき旅も脱をつれ立法りる　里
色咲きうら咲ひかるちる　莧
米舟の花の中より浮つとて　沾
桜の傳へ門をさらそて入り　里
百姓みなりて世ふとも出宗　莧
こそのえ生膳のあくあ法葉　沾
袁地の法縁法くおろし　里
けふのあつきもそくみりともきね　莧

物を言ふ藪の中乃絡線のおそろ　沾
ふるき人〃いひちらそ　里
火燵の火いけて勝手をしまひけり　芭
一石ぬかし雁乃来　沾
折しも寒月の起るて寝れ　里
御に加減乃ちゞみ直さ　沾
肩衣をとしみえて秋暮てころ　里
押合ひのまに〳〵揃て夜居やく　芭

手拂に娘をやりて娘のさき　里
こまくらのえのきもちて仕あつる　沾
花のあと躑躅のさかり林しろい　芭
寺のひけとる山深の奥　里
冬よりも此くなもりせの鴨　沾
一面降てあくる夜の風　里

猿蓑にもれたる霜の松露哉　沾圃

日は寒けれど静なる岡　芭蕉

水かるゝ池の中より道ありて　支考

篠竹まじる柴をいたゞく　惟然

鶏があがるとやがて暮の月　蕉

通りのなさに見世たつる秋　考

盆まへ一荷で直ぎる鮨の魚　然
昼寝の癖をなをしかねけり　蕉
聟が来てにつともせずに物語　孝
中国よりの状の吉左右　然
朔日の日はどこへやら振舞れ　蕉
一重羽織が失てたづぬる　孝
きさんじな青葉の比の椎拾　然
山に門ある有明の月　蕉

初あらし畑の人のかけまはり　孝
水際光る浜の小鰯　然
見て通る紀三井は花の咲かゝり　蕉
荷持ひとりにいとま乞する日　孝
ちら風の又難儀に成　然
わらぢに脈をちらうる医　蕉
湯呑の泊便ぞ坐なき雁衆　孝
喧嘩の中さへも取さえせしぬ　然

砂あげし畑の人のうけまるを　考
あら磯光る濱の小鰯　然
見て通る紀三井寺花の咲かゝり　蕉
荷拵ひとりはつとく永き日　考
こち風の又西南に成なり　然
わらぢに脉をちうちうと鳴　蕉
湯呼の酒債にさな飯喰ゝ　考
喧咄乃さゝとも聞さとせしれぬ　然

鳥籠をはこると起る松の風　然
大工つかひの奥に居る　蕉
米搗もけふはよしとて帰る也　考
うしろ向て市の中を押あふ　蕉
しけあらう湯立花のけもなくて　然
鴨の油のまたぬけぬ寒　考

大せ川なはら二日を暑の穂　蕉
雪ふきおろし中の宮居を　考
まろ持の宗掛て皆出家なる　然
奥の世盃を亭の作　蕉
酒よりも肴のやすき月見して　考
赤鶏頭を庭の正面　然
定らぬ娘のこゝろ殊勝なれ　蕉
露汁のと病るとおもひこの箸　考

鳥籠をほとゝきと鳴尾松の風　然
大工つかひの奥は宮作る　蕉
来鵜も川ふきよしとて鳴ぬ也　考
くしゆむて帝の中を押あふ　蕉
しけあくら酒生え花のけもなくて　然
鴨の油のまとぬけ無き　考

今宵賦

野盤子　支考

今宵ハ六月十六日の空水にかよひ月ハ
東方の乱山にかゝけて衣裳に湖水の秋
を婦くひさしき也今宵の筵ひらきし先ツ
尊翁の席をくつろけて志ハらし敵て
こゝに浪人こゝしみ添くるして野は里
ひら我おもふおもひしかくりかたは人さく
さゝれ人を興さし先ツさゝれあかり緑虫料

なからに弁のめくみ識とやかく尾維摩
のみのたくらひのの息子を倦しちらさ
三度縫りたる何度ハ深川の草庵に四
季の春秋をうらみてとしくにたる月
さつきのあいいを経りて伊賀のふるさ
父母の古墳をとふらひ洛の嵯峨山に
移して盤遊祇園の涼しさもきくよ
の夏かくてやけらに秋をまちくれにけよ

思ふみさすか湖水の納涼もこゝろされて
さてやことし四望の窓を壊て家に草鞋の
驚をやめしく冬霜ハ暮居跡を伺ふし
として偈あり俗あり俗にして偈に似たる
そのなのさとその交のなのわきのあさ深川の
岸に小松を記てたるうさとし深くさ侍ハ
すたりし渡る川味なくして人にあらるく
ありし半年なつうしかりしくしのさし
ちかきてまことるくにまかれかくおのつからよ

去て財布の比も古く□□も面白かりけり
志らきも湖のかるのやうてまつしく不足
わかれて此川か此頃そひておもしろく飛ちる年
のたこ首も暮のとしく眠り年以すこしさく
ら須く客の鳥宴何そ恨うつし梅ちらん

そうろふ醉て移ろふとのあつき罰盃の影
おのそのまさんとたそかれあひぬ

芭蕉

ふるの色や嵐て眠し汁抱

露もそこらや蓬の様先　曲翠

鶯はそこの枝にあそび入て　川高

ためさ華鏡に夏枝拗し也　惟然

月影の雲もちらよる雲の色　支考

志かみて鋳きまる鷺かな　芭蕉

ろくろ色人の形よろひておもへ次窮
峰て月もかゝるおほ原やまして嶽参る
比叡の麓もたゞやくの方へと心ざしや
まれしまき支考ぬは路の方に行とゞ
まて膳所の比叡おほ文字なども打興あけり
さらさ湖の小舟のやうてさそかしおき
われて此川に浮ぶそひにおもしろく戯ま
のさ宵を暮のとくく戻るいまこそさ
ら須なりの宴何をかたるさ絵
らん

そゞろに酔て狂ふることのあるべき罰盃の杯
あるをのまんとたゝかれおひぬ
芭蕉
京の色や崩て眺し涼し　拙
露をそゝぎや蓮の模先　也有
驚いてその狂におろ入て　川島
ただ笹竹にを吹抑し也　惟然
月影の雲もちろよる雲の色　支考
さみて鋳きゐる鷺かな　芭蕉

猪を狩場の外へ追ひかへし　翠

山くゞれば多きまで人の俟　高

飯櫃なる面桶にはさむ火打鎌　然

鳶で工夫をしたる照降　考

おれら友哥に読る〻橋の書　蕉

持仏のかほに夕日さし込　翠

平田に菜を蒔立し⌒とき跡　考

秋風はさる門の宿風呂　然

馬引て頃ひ知る月の紅　高

尾花てつきしものをとける　蕉

帰好のことし死花に取られて　翠

五月をのく襟もよごさん　高

素風に善請のはもていくほや　然

篠ちし村へねけるしくさ　考

咲ち[illegible]の舞も蛍も口きいて　蕉

何その時も山ふ休にかける　翠

笹ほとき様に付てあるきさこ宿　言
蔵こいもる秋月明く来　蕉
ねむやく路先にそ川矢来の町　考
降の日和よ雪月乱ま　然
春くくるまゆを白酒の行ちなし　象
ゑかえの分きき来へあらくる　言
封付し文箱来さる月の影　蕉
そろりしあらく盃の上高元　考

虫籠つる四条の角の河原町　然
高瀬をあくる表一固　翠
今のまに鑓を見かくる橋の上　言
大キな鐘のこんと鳴る　然
盡ちる雉子も飛抑しおきて　考
操りけつけし てゐ柳の下　高

續猿蓑集巻之下

春之部　花桜

温石のあかるゝ夜半やはつ桜　露沾

寝時分に又みむ月か初さくら　其角

顔に似ぬほつ句も出よ初桜　芭蕉

ちか道や木の股くゞる花の山　洞木

角いれし人をかしらや花の友　支考

花散て行んとする軒のやすさ哉　酒堂

富貴なる酒屋にあつらひて文君
が琴も酔のまぎれに思ひ
やられ〻に

酒部屋に琴の音きく宿の花　惟然

賭にして降出されけり桜狩　支考

人の手もかく霞けし吉川桜　沾徳

とまる日や野中の花の小屋　猿雖

七川より花見んと越る女中かな　陽和

見ゆる所かよふゝる花も吉川桜　乙州

咲花をまもりしきたなる老木かな　木節

家居やあゐさえゝ吉川桜　沾荷

二の膳やさゝら吸物鯛の骨　子珊

蓑虫のむ方に出つゝく桜哉　卓袋

田家

鶺鴒の名知やさらん山家桜　李里

咲かゝる花や飯米又十石　桃首

山門に花さくのこし木の始より　一桐

なかれ木の根やあらく花の影　如雪

花笠をきせて似合む人も誰　其角

ちられやらぬ毛床なる花の春　少年 一泓

始りは尾張の声からや軒の花　卓袋

一月も花見のあてや弓射寺　沾圃

八重桜京にも始るちらぬ葉に　全

若葉

濡縁や薺こぼるる土ながら　嵐雪

象の簾やむ比の若葉にかゝる杉　曲翠

夕波の船にきこゆる雉子かな　孤屋

一かぶの牡丹も崩さぬ若葉かな　尾頭

梅 附柳

春もやゝけしきととのふ月と梅　芭蕉

我さくれやたる梅棚もせちの花　野水

若葉

濡縁や薺こぼるゝ土ながら　嵐雪

余所の降りやむ山路の若葉から　曲翠

夕波の船にきこゆるたつなは　孤屋

一かぶの牡丹も寒き若葉かな　尾頭

梅　附柳

春もやゝけしきとゝのふ月と梅　芭蕉

咲さゝれやちるを柳もせゝめ花　野水

守梅のあそび業なり野老賣　其角

里坊に雉きくや舟かしこの花　昌房

投入や梅の相手は蕗のたう　良品

一病僧の庵もれ梅のさかり哉　曽良

あさくし羽本葉まさなし梅の花　万乎

鶯や梅の際まで下駄の跡　魚日

志ら梅や出らしうるゝ宮もなふおかり　千川

霞所や梅のなかひきゐて築ん　丈艸

天神のやしろに詣て

滴手もと紛るゝや梅の離ごゝろ　遊糸

うれし北野のなりや世なき柳　千那

時しそみようちなり川やなぎ　意之

ちり道を散しちらしや古柳　江東 李由

青柳のしだれくゞるや馬の曲　丸之

猫をうけて子等が過る柳かな　巴丈

鳥　附魚

天神のやしろに詣て

あるは筆と行や梅の雛さく　　遊糸

うれしく北野のなりや世々の御　　千那

時しきそあふちいり川やなき　　意元

ちり道を教へちらしや古柳　　江東 李由

青柳のきれゝれくゝせや馬の曲　　丸之江

燕まちけて飛雲過る柳かな　　巴丈

鳥 附魚

鶯よもろかゝる遠気塵(ナケシ)ヶ車　其角

うくひすや野も塚越の風呂あかり　史邦

鶯に手もと休めむなかしもと　智月

鶯や柳のうしろ藪のまへ　芭蕉

蹴鞠もおしけふ雉のちらつかり　去来

春雨や蓑にはならん雉子の声(おし)　洒堂

駒鳥の月のさやちる川はた哉　傘下

こほるゝ花をちらす雲合しき白頭哉　長虹

燕や田をわりかへる鳥の羽音　野童

巣の中や身を細うしておや燕　峯嵐

雀子や姉のこほしし雛の粟　槐市

縄うらにならへて雀の子飼哉　河瓢

引鴨やあの風にはなれての残惜く　助帯

芳野西河乃瀧

鮎の子の心すさまし瀧の音　土芳

かけろふや草よりちらつく小鮎哉　圃水

しら魚の一かたまりや汐たるみ　子珊

白魚のしろきは鳴もはきぬへし　山鋒

深川にやどりて

しら魚をふるひよせたる四手哉　其角

まちうら

かへりても淋しき川瀬や春の暮　正秀

菜の花や松につけたる鐘の道　此筋

春の野やいづれの草にかぶれけん　羽紅

川淀や淡をやすむるあしの角　猿雖

雪の田まるや土筆のものしらず　園指

味ひや桜の花にこゝあらす哉　車来

蕨たゝ咲渓によとの思ひあさゝ　荒雀

堤をへりてうろひ落れたちされ哉　馬莧

流おちれ土堤の切目や落の濡　拙侯

畑にゝみれ形に残されて大根　乃龍

早蕨や笠とり山の根くつてを　正秀

こゝろ新たのあたしに肥る心哉　夕可

目の前に猫の抓出た楊芽かな　一桐

蒲公英や葉の出ぬ先に花ざかり　圓爾

猫戀　附胡蝶

恋猫や月よなびく喧嘩猫の恋　探丸

うき戀にくるひてや猫の盗喰　支考

おもひ寝る孔雀をかける郎猫か　巳百

向日志川かや

ゆかりても翅を動く胡蝶かな　柳梅

衣更のうきやさらさき蝶の舞　惟然

蝶の羽おつる様にうかるゝ　蘭枝

風吹に羽のうらそろ小蝶かな　去羽　室外

幾廻りして花に揚りし胡蝶かな　雪窓

春鹿

振おとしけりや廣沢の鹿の角　沢雉

春耕

好猫のちくれあてたさくて麻　木導

笛れや笠縫をとよ北霜月ね　以筋

千刈乃田をかへ行ら雛段人　涵ち

桃　附椿

白桃や志川ともをなれるの色　桃隣

金柑をまさ盛なり桃のはな　介我

休んかゆく蓮椿の上の桃のむ　雪芝

椿ほくし中をゑめるまた桃のはな　水鶏

花さらみ桃や哥舞妓の脇躍　其角

江東の李由か祖父の懐日の後かれたのし経文題ゟおりるゝ弥陀の光明をいゝみ事を

小服紗を光をやと露む佳るはな　角上

椿を枯て應る花咲椿かな　琲香

取あけて見るや椿のおそくの完　洞木

ちるを椿ほまりおろさは陰て見る　野坡

款冬　附躑躅　藤

山吹や垣より千とる葉裏一重　園枋

拙よつきし草の莚よりや春の日　荊口

嘸さへ調子合はする春のゆめ　乃龍

春の日や唐丸あふる二階ところ　游刀

むかし馬の武江の
旅店を出るに附

春の日や枕く川をしくくひび　支考

春の日や光んまでつゝぬ飛路の鶏　桃首

清霊や面よ返るしてる花笠　風麦

引はくや堤の居る石乃[illegible]（ロリ）　風騒

田家乃人に對して

山吹も落るゝ祭礼鱠なまん　洒堂

婿おこれはゝし礼株や鍬のさき　雪芝

家隣や穂麦にかくれ宿の花　荊口

春月

山の端をちらく見なり春の月　長崎 魯町

春雨附 春雪 鮭

抱よつさ草の衽やりや春の雨　荊口

晦き調子合ゐまゝ春の雨　乃龍

春雨や磨丸あるゝ音ゆゝる　游刀

旅店

たまふかし居馬武江のをまゝ恐る附

春雨や枕くづるゝうたひ本　支考

春雨や出んとつゝみ雛の鎚　桃首

淡雪や雨に追るゝ花の笠　風麦

はつ雪や墣の落る石乃蕈　風瑤

汐干

乃おり杭の浮藻をもれぬ汐干け　去来

品川よ富士の影かよ志おひかな　嵐竹

雜春

出かハりやあそこられ勧るまゝ加帳　許六

菜の花やすこし黄ばむ桐乃苗　風臨

野おとこの松のうくらやわら縁　土芳

かけろふや巌よ腰の掛ちから　配力

山吹花なれのもつれや淵治家　万乎

春ノ雨に稲荷や麻ら雨に中　猿雖

木の芽に川端かへ池やぬけ糸　均水

暮の日や菜の末の中弛み崖　正秀

之天の雛をねる人亭暮の池　仙化

引るゝ礼中に字さるや田螺とり　支浪

三月尽

膳持て白酒賣れ名残かな　支考

歳旦

若のやまたらしくもよ鶯吹　少年 武仙

蓬萊見事のうすゝ花立所汁　百歳

鶯や雑煮過ての里はちる　尚白

蓬萊のかさつひきし螺の貝　圃荷

母者の飯かへりしやまて給　山蜂

清まつ万民蒙を顛倒させしか
てるきそ今の文字出勉し　待乱い

元日やおふるきゝ衣のうら表　千川

人といねまちや梅のうち花梅　芭蕉

明ろねのおのうに梅しおめ君　其角

槇の世に孫まつりやまあたら　嵐雪

鶯歳や友ゐるひて松の陰　去来

鶯に橋をとする娘かな　土芳

元日まちやよく仕ておる世間は　風睡

冬年孫を
まうけて

元日やまいし年から花梅の花　信雉

子規にさす川邊頭やみしかよ　蔦雫

脊さらし柳の枝きりをやゝ花の暮　郷畳

叢雲のまぎれ尽し包庵の鋼のうるさ　耕雪

鍬の薯のきまきをちらし納涼　左松

こん川まちや手まき蒔徒の皇比丘尼　前川

枇杷の葉のかけふの悩や納涼　斜嶺

世の業や鮮きあれとも花勇　山陣

濡いろや大かまつけの納目郷　任行

え見や垂まつろかりよ猫の子篇　竹戸

我若きくゝれ鏡すまえみかり　是楽

摘果や餅みやきゝれる花壱あとし　沾圃

垂なしのろ花見よ似かりみ秋まつ裏　圃角

夏之部

郭公

暁の雲をはなれぬやほとゝぎす　其角

清くよと鳴や湖水のさゝ濁　丈草

声ノ落るや何を本陣よりほとゝぎす　勇元

蜀魄鳴や都は遠し熊野山　支考

鳴鶴の名をや隣里あふほとゝぎす　如雪

燕の居なしむつかしやほとゝ来ず　芦本

淀よりも勢田はなつかし子規　沾圃

比良三上山の杉原にて
順礼乃吹して通りけるとかや

郭公かさゝぎの森や中やどり　闇指

木　附 草花

橙や月のくもれる二の木立　陶指

里しの姿かくりぬちの木から　野荻

園中　二句

此中の古木を切れ柿の花　此筋

年切のをき木も柿の若葉かな　千川

姫百合や上よりさがる蛛の糸　李龍

題山家之百合

志ゝやちゝやきゝ手も深き百合の花　支考

山もとよのゝれて咲やさゝつゝじ　尾頭

冷汁をさくすましけり杜若　沾圃

手のとゝかれぬ縁からもれし杜若　イカ 宇多都

こゝろみや茄子の花も先へさく　拙候

またぬ旅の花無
昼ちるや目を覚まれども花盛　沾圃

夕顔や酔て顔出す窓の穴　芭蕉

夕かほや裸ておきてあつまる　亡人 嵐蘭

藻の花をちらくとあつる入江かな　孫香

蘭の花にほさしれの濁り哉　さし萠

蓮の葉やみんなとさとなまれ離れ　白雪

露おろし並ぶ蓮の露かな　良品

凡

朝露によごれて涼し瓜の土　芭蕉

姫瓜や袖に入ても重からん　至曉

なかん

飽てなる膳をわすれぬ牡丹かな　風宜

子苗

京入や鳥羽の田植の帰り中　長崎 知七

早乙女に結んでやらん笠の紐　闌指

嫁とる男の植おくれ手の廻り　魚日

田植等まてかゝる親の頬かぶり　重行

一田づゝくりかへりてや水の音　如枝

星の子ゝ燕振る手籠の舷　支考

蛍

段違次の蝋にそろへておろすらん　許六

三日月に草の蛍を暮にけり　野萩

納涼

涼しさや竹振りかけ藪にさひ　半残

河花菓や蔭にむかふ夕涼　惟然

涼川の唐子客一へ

ちさき新茶や風にふくらむ縁涼　史邦

涼しさや翼籠手その縄手から　魯翠

石ばしや裏門出て夕涼ミ　長崎 杜年

涼しさに牛は尾振て川の中　万年

腰かけて中に涼しき階子哉　洒堂

漫興　三句

涼しさや椽より足をぬらしけり　支考

生酔をねかせてあふる涼かな　雪芝

たまびに為を
葛屋におきて

涼風もせましき窓のこつれ哉　游刀

いそかしき中をぬけたる涼み船　仝

立ありく人にまきれてすゞみ哉　去来

黙礼にこまる涼みや石の上　正秀

職人の帷子きたる夕すゞみ　土芳

涼しさや一重羽織の風通し　我眉

夜涼やさらひの人の宿の月かな　里圃

盛夏

かさゝきや照りかゝやきし庭の隅　野萩

李盛る見世のあさきの暑哉　万年

喪醫者の宿に先だちけるに
よみて侍る

家々も家を捨て森冷の暑かな　正秀

瓜草の閃のあつさや梓はらひ　乙州

蝶さらる自由まつし居新　怒風

荻ゆふ垣もまかきの暑さかな　尾張 素覧

草のとや暑を月にわかつ尾　我峯

はつよりや扇をさらし手孔あそ空　下官

積あけて暑さしのくや米の山　卓袋

粽ながら鮓もおのかつきら船　里東

立よれはたむろ川とらやの暑かな
舟の子　沾圃

筍にぬけてくづるゝ岸の崩かな　可誠

若竹や烟のいづる庫裏の窓　曲翠

五月雨 附夕立

志ゞ漉るや素くもかすれし黴雨の中　出羽 不玉

さみだれや蠶わづらふ桑の畑　芭蕉

五月雨や踵ふまれぬ蟻たらひ　治圃

夕立にさし合けり白傘　拙仮

白雨や蓮の葉ふく〳〵池の芦　苔蘇

夕さらやちらしかけたる竹の皮　暁鳥

津ふられ傘かる宮や其所　圃水

蟬

白雨や中戻りして蟬の声　正秀

千川と耳て啼て走り蟬の声　胡故

森の蟬涼しき声やはつき声　乙州

蟬啼やぬめの織る窓の昼時分　暁鳥

千川を

秋の月や潮こえてくる津鐘　葉蛤

雑夏

[illegible]掃除して手の動やせ團かな　杉風

虫の喰ふ若葉やおかしや寺子畑　荊口

夏痩も移らひの中の古と川なり　イセ 如真

川待にいて、

志ら焼や麦かくしくる魚て極饒　文鳥

異草に永うらもや園の蕪　嵩雫

夕闇光おくろも志つろや酒もれし　水鴎

故郷にとゝろみきく母を
やしなひて

魚付る幸も得れ法うら八　馬見

椋せきさや筑かさぬく日の面　雪翠

澤渡や追付る雨のあと　野童

蝸牛ほのり葉のてんきる角　水鷗

悪の剛階を
しやせ

京形よ屋様のたてや筆　芭蕉

粘ころ葉帷子かぶる手ぬぐひ　惟然

貧僧のくるしき冬のさむさを
嘆きくよするなかにある日の
納涼を扇一本にして學ぶ
ある

帷子の袖ひきやぶし銭五百　支考

穐之部

名月

名月に麓の霧や田のくもり
名月の花かと見えて棉畠

はせを

くらしを伊賀の山中にして名月の
おもての二句をなしおきていつれか是
いつれか非ならんと侍しにけれはわか
つくりは月をす川の根の雲を
されはなるさたくみあるつよ地附句

く菌と國位なしのゑめとりやさしく
琳藤が云芳様色ゐかあれて甲國
瀟しと思ふところ老杜が唯ゐ
ゐのこなりせしへるものかくらなる
へ下りし此後の棉さゝけむ言葉ゐ
名篇にして心をむやくやうりて今の
この新所の一篇に得ありん月乃
うつしこれやさをともあるをとれ
もちつつまにもおもひやられ
ハ花に清香あり月に陰ありて
是も情のまをまなれすあらし

前ハ寂寞をむねとし怜も風雅ハ其
もりをしらぬ五つの何の是非を
さらさるをかさねて後の人
なけはあるへし

支考評

名月の海より冷る田簑の船　洒堂

明月や飛にかくれを鏡のつき　如行

ものし此根をもん月見ハ　露沾

ぬゝ川あらいはかひやきむれの月　　智月

名月やもゝの隠き人の影　　闌指

明月や文絲より花やすさき客　　凉葉

明ゝや一両咲く捨る隠もなし　　不玉

井切乃梨子の筆の隠く見ゝ汁　　配力

名月やすなのくゝりゝ白さ記　　左柳

明月や杉さんの松よ人もなし　　圓水

松原の気もなくてゝすかなめの月　　山峰

明月や霞ぬ迄よ出て行志女次　　風国

名月や四よ人気し儲ぬ物　　需笑

老の身もとゞ宵の月も内てゞ世　　重女

明月にかくれし翌日花哀なり　　泥芹

以路の西よありてかこの
隣をおもひ出されけれ

二つんまて渡る御川ぬる月見汁　　支考

茄子蔵と烟まてり咲る月見汁　　空牙

柿のなみ花次畑とれよ月ゝ外桃　　如真

山ゐるれち川ども霧晴や峯の月　宗比

名月や里のゑひのまゝ手宗　木枝

場に居て月見かゝるや遠桟　利合

明月や都ゝかしまし江戸中方　丹楓

明ろさや何も出ろ花松の道　野萩

船入乃客ては手鉄ら川月見外　正秀

淀川のちよりに
月をうつして

舟引の花をかきよけて月見外　其筆

待宵の月に床しや宗鑑卿　景桃

宗祇の三老女とふ庵主あり二文
好監の秘して伝へ給し
書物をひらきて

姨捨を

閨の内のちらりやに今の月　浴圃

露おきて月入あかるや塀の峰　鳥光

するゝつく月まさしあかるぬ梢外　里東

月影の海の昔やも扇下　牧童

深川の末五本松といふ所に
船をさして

川上とこの川しもや月の友　芭蕉

十六夜はわづかに闇の初かな　仝

いさよひは闇の名もなしそこの月　猿雖

七夕

二よりや星のよの安河の河　惟然

星合をさてまて待る朝かな　探芝

船ふりの雲きえわしやおりしの秋　東潮

まなこさへいそかる秋よあつさかな　沾圃

秋風や薫姫の園もちら　乙州

立秋

雲まねくや座まてによと秋の
秋　露川

秋きぬ川や中に吹ぬる朝　尤次

槿ごよ

朝露の花透る風桔梗桔梗の花　桃隣

朝も昼もなきぬ桔梗のつぼみかな　位右

ちりはたれはひぬ馬骨の姿かな　濁子

きゝなれし鶉の床のあけくれ哉　馬莧

一筋も乱れぬ雨のはらり烟にて　烏栗

弓張はきえてたのもれや萩の岡　支浪

贈芭蕉翁

百合さえも色葉露をもち残る余花　風葉

はよ姫のなまでもゆるし給はまし　文邦

梅のある葉ふき持かしや鶏頭花　万平

鶏頭や雁の来る時尚あかし　芭蕉

鶏頭の落るたえまぬ月夜かな　全曉

折しもや雨にはさそふ萩の露　雪堂

葛の花芙蓉や露に動く秋の風　荷兮

山人の昼寝をさまされ鳶の声　加賀山中 桃妖

風毎に長く〳〵成り鳴つゝ
雁の声　杉下

鶏頭の花咲そへて雁月夜　田上尼

贈芭蕉庵

百合さらぬ芙蓉を残る余かな　風叢

はつ姫のなまめきも詠しはつ花　史邦

桔梗のかゝる葉を抱へしや鶏頭花　万車

鶏頭や雁の来る時なほあかし　芭蕉

鶏頭の散る事しらぬ日数かな　全暁

折しや雨戸にさはる荻の声　雪堂

葛花葉やおもてに動く秋の風　荷兮

山人の昼寝をしばれ蔦かつら　加賀山中　桃妖

風毎よ長くなりけり蔦かつら　杉下

我うね

鶏頭の昔めく人の庵の月哉　田上尼

あさがほの這ふて去けり柱かな　嵐指
ころもきはさらぬやうもて湯の舟　風麦
朝顔にしほれし人や鬘帽子　其角

虫　附鳥

きえ〳〵し傍に経よみねぶる　女 可南
竈馬や顔に飛つくねぐら棚　小枝
火の消て胴よりかゝる虫のから　正秀
秋の夜やうきと新とをとらしす　水鷗
みの虫や形に似合し月の影　杜若
蜻蛉や何の味ある草の先　探丸
蟷螂や腹の出やれる石の上　蔦栗
蓮の実に軽さうらん鉢の宿　示峯
ぬけがらにかゝひて死る秋のせみ　丈草
鳥啼にゆられて浦の苫屋なり　馬莧
鶺鴒や走りかゝれば石川原　氷固
蜑の梅もえあつ付や嗅鶺　支考
老の名のありともしらで四十雀　芭蕉

螳螂や何の味ある草の先　探丸

蝙蝠やの腹を出しやれる衣のうへ　萬翠

蓮の実に振さるゝん蜂の宿　示峯

ぬけがらにならびて死る秋のせみ　丈草

鳥手に沖ゆく浦の蘆花かな　馬見

鶺鴒や走り尽くは戸川原　氷固

黍の穂を尺あまる時や峰鶉　支考

老の名のありとも志らで四十雀　芭蕉

颱風

秋の野や二書ならぬ姫か世時　游刀

雀子乃驚も足や秋の風　式之

何なりとかしおもしろ秋の風　支考

松の葉や露とても細尾秋の風　風国

喜のつら草の花手入手やまかひ　圃燕

蜻蛉も門やわにちらすもしら露　丸石

おれして来し海の町分の船　猿雖

稲妻

独りて寝覚ましとのさとし稲の露　竹芋　一東

稲妻や雲より先に浅田の上　宗比

行すゑや稲つく床の雲の端　土芳

稲妻や闇の方行五位の聲　芭蕉

木實　附菌

團栗の落て飛行わけ　為有

炭焼た渋柿たのむ役の船　玄虎

秋風や円く成たる柿の尻　酉堂

時雨しや常をもろく梅の汁　孚翠

松茸や焙ても清見一盃　佑圃

伊賀の山中に阿蘇の茶店を待ひて

松茸や都に近き山の形　惟然

[illegible]

松茸やしらぬ木の葉のへばりつく　芭蕉

楓

後屋の塀にまとはれたり村紅葉　小鰹

麻

麻すねに袂の麻や風の音　風睦

葉かつぐ女麻かりて小　一敵

農業

起し置人を迎へり蕎麦の花　車庸

木の下に狸も見ゆる種蒔　買山

山路の牛従ふうはをとつれて

さとゝけるものかくし時雨の稲　如雪

後世の塚よまもられけり村すゝき　小鰹

麻

麻すれに木風の麻や風の音　風瞎

麻かつぐ土よ麻抑ところ年明ゝ小　一敵

農業

起しほし人を逃けり麦のはし　車扁

木の下に種もちなき穂鶏ヶ畦　買山

さなへとるゝもめくもの時の稲　如雪

水鳥の斗従よ
つゝ迷ひとつれて

蕎麦はまだ花でもてなす山路かな　芭蕉

早稲刈て落つきかほや小百姓　乃龍

山雀のやさしに啼や霧の稲　斗従

なりふりさはる河原鶸(ヒハ)ちる小菜畠　支考

一霜の宿や草乃さんと刈　仝

肌寒き始にあかし蕎麦の茎(くき)　惟然

百なりていくつゝゝ抱を唐からし　李由

大津は京にあそひて将流と
いふものゝ稀に見ひなす

そのはらや茄肌上き牡丹の種　沾圃

菊

菊草二百十日も恙なし　萬里

直なし咲やなと白菊の玉牡丹　潤子

煮火木綿の露下に咲し菊の花　支考

題屏

けさぬる月もかゝる山路の菊の宿　兀峯

借りけし宿の晴々ぬの菊
暮秋　去来

唐沢や背負ふて帰る秋の暮　野水
むき秋を誰らの桑の恨り舟　乙州
折あきや手を離るける顔の鳰　芭蕉

雑稀

又六十海老はのやして鍛一ッ　之道
顔桑かく死ゆ家路も松の中　團友
あく鷹の鸚々のちらのおきするな　睡止
待る段や忘れ附なる秋の西　巳友
あなうひに霞のこわろく　勒吹　荷兮
見ろおや稀ゝの家路の菊あり　万年
柿のかふに焼ゝて藍てん鹿蓍　東門宗波
おみつゝ馬り宅に骸骨ゆるも
の脇鼓まりかまへて鯉ぽる
谷まき畫て諌奉の傑かり
うきすくりおいしに背ゐ乃
そめるみれなとハる死あるひ
よ蹉ゝんやかの髑髏を種
かくして猪よ思ふらつき

わくさまも只との生なおを
ちかきさるくしものかたり
稲つまやうねのやしろう
蓼の穂
ちよ女

冬の部

時雨 附 霜

こがらしの頃の時雨やいつ時雨　野坡

しぐれぬを又松風の只きかん　小枝

けふばかり人も年よれ初時雨　芭蕉

一時雨まてしばしまてく月夜かな　露沾

ぬしぐれ中橋の草紙萌黄加藏　馬莧

冬之部

時雨 附霜

ちる比の頃の隣や山時雨　野坡

志ぐれ達を又松風の跡またれ　小枝

けふばかり人も年よれ初時雨　芭蕉

一時雨まことに通る月夜かな　露沾

初しぐれ中橋の草花着衆加藏　馬莧

平押にみな四もろ附ゐるか　野明

朱賣やひとく志らぬの舟廻り　南指

椀賣もやよ芝屋の秋附ゐ　空牙

元結のもてあつり也附ゐる紙　為有

宮ろれや鏡をさらう一しきれ　鶴口

名のみ盃て青蝶をめぐる附ゐ作　野荻

柿包む月もむかしやむら附ゐ　霞川

さゝうり志らねて星を霧附く　里圃

濱やきをなでしめのかつみをまく　みしの貝殻のつりしてあみにさせりけれ

中西の紙目くりあり尾附ゐる紙　沾圃

さし川柳や本の出かくれの絲　水館

飛とらや一葉ふらし詫と紙の窓　支考

元禄辛酉之秋
九月芭蕉堂菊園之遊

宗匠の宿を秋十日月のりかれ
まつけ給ふなぞての出来ぞれ
此ほどかゝくもかゝ給ふ事も

ちかく附句を請と云座有たゞ菊
すゝきと河を隔て里坊のしめやかし
なおゆかしもやあらむきくやすゝき
菊紙にして人くしますかし
これなる事なからぬ

菊の香や庭に切れたる沓の底　芭蕉

柚の色や起あがりたる菊の露　其角

菊の気味ふかい境や藪の中　桃隣

小寺の白菊やほつまる菊の露　沾圃

何鳥のかざしに来ん菊の枝　曲江

菊寄る宿も園に雅をなれり
柴桑の隠士は籬の翠を愛し
さらに菊も籬のたゞしき品を
殊にすさまじき折にもよすが有て
もし今の人の菊をあはれびて
まつりなど好みて求めなどに
家の菊作るをもて園を愛しつけ
さながらあはれやとて人見竹洞
世々盛り菊も遂になれにしより
是は夕暮しなれ枝もあらぬて
あるは都にもかくれ聴きあるは
風の吉角ありて　馬莧

一露もこぼさぬ菊の氷かな　芭蕉

山茶花は元より開く帰り花　車庸

冬梅の声よし川端川や鳥の あそび　土芳

山茶花も落てや霜に花椿　素堂

木葉 附冬枯

おもひなし木の葉ちる夜も鴨の聲　沾徳

日生さんて江の朝出る木葉舟　露沾

冬川や木の葉は黒き岩の間　惟然

うらやましさぬ想ひや作ぬ々事のかな　東推

草

水仙や孫嫌ひ月の透ぬ　曲翠

なつ長清く咲や冬ぶかちの水仙花　氷固

水仙のところく也蘇しき　唯然

花蕊ゝ趙南のちらちら

山家集の題よみけふ

一露もこぼさぬ菊の氷かな　芭蕉

山茶花の匂ひもえんり聞く酒　車庸

冬梅の出る川端て川や鳥の　土芳

山茶花も落て地や霜枯枝　素竺

木葉　附　冬枯

おもひなし木の葉ちる夜の　佐徳

日生きんて江の朝ちる木の葉　露沾

冬川や木の葉も　唯然

欅より足さがりよき木の葉かな　枳風

む松坊宗比の
庵をとふ川まで

ちるよりも先秋てうつろ落葉かな　（イセ）一道

枯なてし霜にもなれぬ枯なくも　杉風

牛のかよひ道さへ枯野のまゝありかれ　桃酔

冬枯にきりくつてくろなかれ　乃龍

草枯てまくり川て芋らぬ鴫も浮り　利牛

野ゝ枯てのそりぬ抽なし霜の肩　支考

枯野にやとまりもあるに霧もなし　智月

上五字

風や背中吹くし牛乃あかり　風竹

木枯や刈田の畔の鉄気水　惟然

こがらしや其実まきちりし牛比角　塵生

夷講

ゑびす講酢売に袴きせにけり　芭蕉

十日比除猫鷺も鴨に成まり　利合

鳥　附いを

乃やゝの海さして

塵浜にちどり始日もなし浦嶋　白空

追かけて竈にころぶ千鳥の声　鳶京

小夜ちとり庚申まちの舟屋形　其角

入海や塩の釜に鳴千鳥　闇指

毳（ケコロモ）につゝみてぬくし鴨の足　芭蕉

ゝ川鴨を犬追かけてはらゝ飛　作木

枚方にころひのつまゝ寒氣かな　亡人　利雪

うらしまや海月にかゝるなまこ汁　車庸

見ゝ透や子持ひめのうれ氷　似水

一堰にさ川白魚や雪の前　杉風

かく姫川や腹をうたして降霰　拙候

杜夫魚を河豚の大きさて水上に浮み
跡の川にのぼるあるうきなり

冬月　附衾

喰つみや行ハ賣ありく冬の月　里圃

あら猫のかけ出す軒や冬の月　丈草

何事も霜かるゝまでたり錢鋳すみ　少春

水仙や門を出れば江の月夜　支考

埋火

埋火や壁には客の影ぼうし　芭蕉

佛しきる木くらき鐙くる火燵かな　少年 桃先

白雲や月夜をかへり座(?)火燵　同木

雪

納豆や門に檔あり夕あらし　其角

鉢々や月雪すさし酒の味　仝

雪あれて心のそこのゑびすと汁　冬東

鷦鷯ちかきところくれの雪　祐甫

雪垣やさしてね人のかたのあて　蔦栄

ぬくつるも足の草鞋を出かへりの雪　支考

片畑や雪降かゝるすさき俵　圃吟

里ちんのきゝんや月枝のかね　丈草

髪判を條ある宮のくゝりの汁　陽和

伊賀大和かゝる山や雪の花　配力

神樂

わか神楽に嵩を吟ずる宵かな　史邦

紅葉きゝよ

今日晴やらなしんでの海の許　路草

紅葉の千鉢賣さすありけり　馬莧

娵入の門もとろき繕きよ　許六

寝を送りしたり鉢たく男　沾圃

煤掃　附　餅つき

煤さはきや鳳凰の巣鴨の甲　孫香

煤掃やあさ海よかゝるさと姓　黄逸　米鴦

年の内なは僕のかたや煤ん鉢　馬莧

煤はきやかくされて出る所かな　宵如
煤掃や折ぬ一枚流れくる　唯然
餅つきや火をかゝげても男ぶり　倣水
餅はきやあくるまの鶏のとや　嵐紫
起ち描の手借ひきれや小蒲団　馬佛

歳暮　附 節季候 衣配

三絃の尻迄も賑ふの市の音　角丘
門松やまきて来る手の洗ひ髪　里東

貫之も聞ても見たる手の暮　草士
猿もまのわらひもやとしの暮　車来
大年や款子もとる指ぬひ　万手
襷きぬ鉾のもありとの背　李由
年の市借手呼ん挑灯との　其角
打かけた小豆も市の賑ひ　正秀
引掛小一筋やしの暮　揆子
楠の楠のあらあし年のくれ　猿雖

天鵝毛のうら縮をかけして道の霜　　惟然

貧荻よ筆を捨てやしの霜　　

けふは圖司呂丸が弟子といへるより京に
のぼるとて伊勢にまうでて侍りけれ
いつのむかしの笠が陸奥をもいひ
話して今はなき人となりけり

盗人にあふた夜もあり年の暮　　芭蕉

余所に寝てどんすのふとんのこゑ　　支考

漸に寝所出来ぬ年の中　　土芳

己か事にも弱りて乱る萩の中　　高白

己か事にの枯子さへ始ての後に　　少年 桃後

歳暮も来の子ら川さ配　　山蜂

一志さへ障て静かに除夜の鶏　　利合

雑之

小屛風に茶を挽かゝる寒さかな　　斜嶺

柚作るゝの風さかしその端　　土芳

井の水の濁てかれたる寒さかな　　李下

ふかみ草や畝伏村の長ほとゝ　仙杖

ふかきしらをの帰しや土龍　圃仙

火蛙より霞の坊問まれけり　雪芝

山陰や猿も鹿も抓く冬の向　コ谷

姐枝は人参の根のしさかり　法圃

菊刈や冬めく影の玉斯　杉風

釈教之部　附 追善 哀傷

涅槃

涅槃像あるは貴見る門ならぬ　法圃

孫すん合や般手合る洋料の前　芭蕉

山寺や猫守き居るねさ釈像　不撤

貧福のまことを去る涅槃像　山鋒

催

供間

雁なくや月しら〳〵と井戸のやね　曲翠

菊花や御らうれて二三日　不玉

雁仰や釈迦と提婆を従へし　之道

悳条

涙袖もくなれくさし謂まり　嵐雪

寝覚のかさしやうき魂祭　去来

故翁怺場らなみふ出祭　洒圃

甲戌の冬大津に侍しきその

かくのことより消息きこえられ
在旧里にゆりて盆會よいとなみて

家はみな杖にしら髪の墓参　芭蕉

悼竹年　二句

うかしきの麻木の箸も桃の花　なく　惟然

その穀をもりぬその手に秋の風　支考

俳くし此
詩の手に行て

青の庭や極雲のさゝろその附ら　木節

ちらちらや淡雪かゝる酒桶の水　支考

法然様

柚も柿もおらがなれなり法然様　沾圃

臘八

臈をさしくりてこほれ出納豆汁　許六

雑題

何のあれかのあとにひるま大師様　如行

洛東の真如堂にして

善光寺如来開帳の時

涼しくも野山にみつる念仏哉　去来

みなとをすきやく二たさしけりしの花　智月

けし畑や霧吉川まりて仏在世　乙州

ゑのみなに川越向ふや富士まて　亨郷

手まもしに朝の月涼しゐる念仏　野坡

食堂に雀鳴なり夕時雨　支考

旅之部

送別

元禄七年の夏ばせを翁の
ふるさとへかへりて

麦ぬかに餅屋の見世の別かな　荷兮

みかへるや柿ぬひなりし坂の上　惟然

許六か
木曾路におもむく時

旅人の心にも似よ椎の花　芭蕉

留別

洛の惟然か宅より
古郷に帰るを送る時

嵐やとも此三の草鞋ならしけり　丈草

鮎の子のしら魚送る別哉　芭蕉

甲斐のゝの國に帰る時
江都のふもとにかゝりて

手よりて牛に乗りけりも落る花　木言

鞭つ馬や浮世をめくる雑かな　越人

ゑへもつくる川柳や旅の旨　野径

ちかの國よりむかしくは
くらのくのさくらをきて

可紀さくき谷に地かりけり虫の声　乙州

十團子も小粒になりぬ秋の風　許六

大名の寝間にもねたる夜寒哉　仝

く備戸に [illegible]

ふるしきも荷をもちて川霧盆の旅　単呂

はらく土て家にたる木曽路　猿雛

明衣のたくさんそ角にし振姿　我峯

あさましや手て洗ひ給ふし　家の馬　史邦

四国の思さし出し　伊勢の
くみくはりて

文月の扇かゝげて秋涼し　亡人　呂丸

我庵はつくね猪の寝くら哉　沾圃

常陸の国なにかしあとひとらふ所に
打まどろみてやどり求んとせしに
そのあるしは法文あまたとて　苔を
くゝらまし一夜別時の軒の
下にかゝりまり　終して

椽の露情やも梅に出豆粥　支考

吉川に也や道すからふ楼もと　仝

元禄二年の冬　霊洲の茅居
より武江におもむくとて関西
の駅場年の宗にいたりて

宵かりて名をなのりける
しくれ哉

ちくさい

續猿蓑ハ芭蕉翁乃一派乃書也
何人の撰といふ事をしらず翁遷化の
後伊賀上野窮乃兄松尾氏ふかく
此集を秘して東武にて是を得て
漸やく翠のむかしをあつめん
世に廣むる事をゆるし板行書肆
或ハ蔵けしあらハ世人ふかくは
侍らは其年稿の事なりけり

一字ばかりも一切あやまれ無之候て
乃書にも手紙をもつて此を極めたる
とふをも知之

元禄十一寅
五月吉日

かなも
一陀宗峯